



怖かったんだね

君の心の中は棘だらけの森みたいだったよ

ギザギザで、ひどく暗かった

胸ぐらを固く握り締めたままの加夏子の肩をそっと両手で抱くと、殉は落ち着いた口調で語り始めた。

「辿り着いたのは、大きさも判らない広い場所だった。多分、カナちゃんの心の一番奥深い所だったんだろう。そこで傷だらけの君を見つけた…初めて見たよ、カナちゃんの顔。前から想像してたんだ、どんなコなんだろうかって…」

殉が軽く微笑んでみせた。

加夏子が顔をあげ殉を見上げた。

「君はボロボロの姿で、必死に助けを求めている。君をそんなにした奴もそこに居た。恐怖の形…それは刀を手にした男の姿をしていた。そして…」

殉が言い淀んだ。

「そいつは、僕の兄さんそっくりだったんだ」

加夏子の目が張り裂けんばかりに見開かれた。

「そんな…だって、あなた目が…」

「見えるんだ、誰かの目に映ったものを。その人の心に映った映像を。兄さんは鏡に映った自分を僕に見せてくれた事があった。アイツの姿は、その時の兄さんによく似ていたんだ。それで僕は動揺した」

「ジュンのお兄さんが、私を」

「そうじゃない！ そうじゃないんだ、ただ似ていたというだけなんだよ。でも僕は動揺し混乱した。他人の心に深く入り込んでいれば、相手にもこちらの心が影響を与えてしまうんだろう。僕が一瞬でもアイツを兄さんだと思ってしまったことで、君は僕とアイツが一緒の存在か、それとも仲間じゃないかと思いついてしまったんだよ」

殉は必死に訴えた。

「信じて欲しい、カナちゃん。アイツは僕の兄さんなんかじゃない！ アイツと僕は何も関係がないんだ。アイツはもう何処にもいない。もう怖がらなくていいんだ！ 他人を疑わなくてもいいんだ！」

「…無理よ…」

「カナちゃん！」

「どうしろっていうの！？ 自分でも抑えようがないのよ、頭でいくら思っても駄目なの！ 軀の奥の奥から、般若みたいなアタシがいつでも顔を覗かせてる、自分でも止められない！！」

「方法はある。僕を、もう一度カナちゃんの中に潜らせて欲しい」

信じてくれるなら…

殉の手に力が込められた。

◇

時計は零時を差し示そうとしていた。
カツ、カツという音だけが響く部屋の中。
向き合った二人は微動だにしない。

加夏子は、ベッドの端に腰掛けた殉の前で目をつむっていた。両手は膝の上でしっかりと握られている。
殉もまた瞑目していた。殆ど暖房の効いていない部屋で、彼の額にはうっすらと汗が浮かんでいた。

かれこれ3時間が過ぎていた。
あまりにも静かな様子に不安をかきたてられた恒彦達が恐る恐る部屋を覗いた時、二人は既に彫像と化していた。
加夏子も殉も、恒彦や紗季子が部屋に入ってきたことに気付いていない。意識すら無かった。
瞑想で言う完全な三昧境にあったのだ。

誘ったのは殉だった。

「いいかい、これからカナちゃんとシンクロする。この前は僕自身、訳も判らないまま君の中に入っていった。君と強い絆が生じていたのを感じていたから、あんな無茶をやってしまった。でも今度は違う。君は僕を拒んでいる。そこに入ってゆくのは多分、もの凄く強い抵抗にあうと思うんだ。正直、たどり着けるかどうか自信が無い。でも僕は信じてる、カナちゃんが本当の自分を取り戻そうとしてる事を。そこには必ず僕のいる場所がある事を」

離れていていいよと言うと、殉は加夏子の車椅子を押してベッドの傍へゆき、自分は浅く腰掛けると静かに目を閉じた。

間を置かず猛烈な眠気に襲われた加夏子も、あらがう事なく瞳を閉じた。
時間は意味を成さなくなっていた。

◇

「あなた…病院に連絡したほうが…」

生きている人間とは思えない二人を前に、不安をかき立てられた紗季子が恒彦の背を押す。

「待つんだ、サキ。久我さんが言った、『ギリギリまで二人に干渉しないでくれ』と。心の中の事なんて私達には判らない、だが彼は…堀川君は、前回の失敗で学んだ筈だ。だから任せよう。彼を信じよう」

そう言う恒彦自身、強く嚙んだ唇の端に血を滲ませていた。

このひとも戦っているんだ
カナと一緒に

恒彦のさまを見た紗季子は、恒彦の背を押す手を放した。

私も一緒に戦う
このひとや、血を吐いてまでカナを救おうとしてくれた彼と
お願い、加夏子を助けて

お願い

神さま…

久我さん…

紗季子の手は真っ白になるまで握り締められていた。

◇

目を閉じ、自分の頭の天辺から首、背骨に沿ってゆっくりと下に向かい沈み込んでいった。

意識を光る球体としてイメージした殉は、徐々に徐々に、深海潜水艇が海溝に潜ってゆくように、それを軀の底の方へと沈ませてゆく。

呼吸のリズムは加夏子に合わせ、だが少しずつ遅くしてゆくと、球体が沈むに従い今度は加夏子の呼吸が殉のリズムと同調してくる。

誰に教わった方法でもなかった。

幼い頃、たらい回しにされた親戚の家で、盲目の殉には赤子をあやす位の事しか出来なかった。

ぐずって泣き止まぬ赤ん坊を寝かしつけるのが、いつもの殉の役目だったのだ。

そんな日々を繰り返すうち、彼は奇妙な特技を身につけた。

どんなに癪の強い子でも、殉が添い寝してやるとピタリと泣き止んで、やがて二人ともスヤスヤと気持ち良さげに眠ってしまうのだ。

成長し、サトリとして親戚達に忌避されるようになるまで、殉は子守の名人として重宝されていたのだ。

無我夢中だった前回と違い、今度は始めから自分の意志で、覚醒している相手の心の中に入り込んでゆかねばならない。どうすればそんな事が出来るのか。

殉が思いついたのは、子供の頃に散々やったこの方法だった。

いや、正確にはそれしか思いつかなかったと言うべきであろう。

こんな事を日常的に行ってきた訳でもなく、ましてや専門的な訓練など受けた事も無い殉にとって、加夏子とシンクロするにはこの方法しか選択の余地が無かったのだ。

彼は知らなかったが、チベット密教において『夢見の法』とされる修行法と彼のそれは酷似したものであった。

密教僧達はこの方法を用い、自らの夢の中へ、自我を保ったまま入っていったという。

異世界を自在に飛び回り、言い伝えでは現実の肉体もまた夢と共に宙を舞ったといわれている。

殉は加夏子と一緒に深い眠りに落ちた。

眠りながら、尚かつ彼は『目覚めて』いた。

暗黒の中を下降する彼の意識は、緩やかな螺旋を描きながら、それを探していた。

どこだ

どこにあるんだ、彼女の「扉」は

闇の底は永久に無いかのように、どこまで下っても見えてこない。

萎えそうになる自分を叱咤しながら、殉は更に深く深く、暗闇を潜っていった。